



## 「リベラル・アーツについて考える」 活動報告

3月19日(水)女性研究者研究活動支援事業の啓発活動のひとつとして、第1回文理融合セミナー「リベラル・アーツについて対話する」を開催しました。卒業式の翌日、年度末という忙しい時期ではありましたが、当日は、学部長をはじめ、教職員あわせて34名が参加しました。

セミナーは、赤堀 三郎准教授(社会学理論・社会学史)をファシリテーターに、4名の方に話題を提供していただき、その後自由に対話するというラウンドテーブルの形式で実施されました。



まず、轟 莉莉教授(文化人類学・東アジア社会文化研究)に「リベラル・アーツに関する思考と実践」と題して、リベラル・アーツの多様な定義を整理していただき、**教員は学問と学生間の「媒介者」である**との轟先生の基本的姿勢を中心にお話をしていただきました。

高橋 修准教授(博物館学・日本近世史)の話題提供は、「**ドーナツと教養** -ドーナツの穴は本当に無意味か?-」という刺激的なテーゼから始まり、高橋先生が実践されてきた博物館におけるジオラマの展開のように話題が展開され、気がつけばドーナツの穴の魅力に落ち、穴からリベラル・アーツについて考えるという思考することの楽しさを感じさせていただきました。

3番手に登場したのは藤野 裕子専任講師(歴史学・日本近現代史)。一番若手の研究者ということで「私はまだ反抗期です」という一声に始まり、**リベラル・アーツの持つあやうさ、今の時代にリベラル・アーツをどう読み替えるのか**という重要な視点を提示していただき、その後の対話も大いに盛り上がりました。

ラストバターは田中 章浩准教授(認知心理学・認知科学)。〇〇心理学、認知〇〇学と考えることから、**複数の領域の知を結びつけ思考していく必要性**や、大学院の位置づけ、小規模大学院ならではの縦横からの学びの可能性について語っていただきました。



終了後のアンケートでは……

「とてもおもしろく勉強になりました。職員の方の参加、発言もあり、とても貴重な集まりでした。」

「話題提供者、フロア間でのディスカッション等にもう少し時間をとれると良かったのではないかと思います。」

「研究支援のために必要なことではありませんが、「東京女子大学の理念、教育目標の歴史研究」を今回のような形式でできれば良いと思いました。」等の意見が寄せられました。

このセミナーを受け、今度は、新しく入学する学生を始めとする多くの学生・大学院生・卒業生を対象とし、

5月19日(月)に第2回文理融合シンポジウム「問いを立てる -女子大におけるリベラル・アーツを考える-」を開催します。



## 「問いを立てる -女子大におけるリベラル・アーツを考える-」開催

大学での学びの醍醐味と難しさは、いかに問題意識をもち、問いを立て、問題解決のために多角的に思考するかにあります。「答えのある問題」を解くのではなく、自ら「問いを立てる」ことはどういうことなのか。そのためにリベラル・アーツを柱とした本学の教育がどのような意味を持つのか。3人の講演者の提言をもとに、考えていきます。

日時：2014年5月19日(月) 13:15~14:45(開場 12:30)

場所：東京女子大学(教室は後日、学内に掲示致します)

対象：学生・大学院生・卒業生・教職員・一般の方 \*託児実施します。詳細は女性研究者支援室までお問い合わせください。

講師：山田純子氏(同窓会会長)・加藤由花氏(情報理学専攻教授)・乗立雄輝氏(哲学専攻教授)

司会：黒崎政男氏(哲学専攻教授)

参加無料 / 申込不要

主催(問い合わせ先)：女性研究者支援室 共催：女性学研究所 エンパワーメント・センター





## <メンター制度>研修 活動報告



1月31日(金)、研究活動を継続・発展させていくための相談事業のひとつとして、メンター制度の導入を検討することを目的として、公益財団法人21世紀職業財団の石川邦子氏を講師として、<メンター制度>研修を開催しました。  
当日は、学部長をはじめ、教職員、卒業生を含め15名が参加しました。

研修では、メンタリングの概要、機能、効果といった基礎的な知識から、他企業・他大学での導入事例の紹介およびメンタリングプログラム導入についての具体的な方法、留意点等、具体的かつ丁寧な説明を受けました。

研修終了後のアンケートでは……

「これまでを振り返り、メンターがいればと思う場面や、同職種の年下のひとたちに『ベテランの先生ではなく、少し経験年数が上の人だから相談しやすい』と言われた経験があるため、制度としてあると良いと思います。」

「特任研究員、博士後期課程学生が研究者をめざすうえでの様々な不安に対応できると思う。ただし、メンターとなる教員の養成(または適任者が得られるか)に不安がある。」

「ハラスメントなど、具体的な問題が生じる前に、より良い関係を築くことに貢献できるのではないか。メンターになるのは大変そうですが、ともに成長することができるのではないか。」

といった多くのコメントが寄せられました。

女性研究者支援室では、メンター制度の有用性や課題が明らかになったことから、その導入にむけ検討を重ねていきます。



## Table Talk Vol.9~Vol.11 + 番外編 活動報告



「博士課程のすべて」

12月11日(水)  
Vol.9 with 堀 聡子さん

昨年の9月に、東京女子大学の博士課程を修了された堀さん。  
博士論文『子育て支援の新展開と家族の境界 —「子育てひろば」をめぐる実践に関する社会学的考察—』の内容や、テーマ選定に到った理由、大学院でかかるお金のこと、卒業までに必要な年数など鋭い質問がたくさん寄せられ、その一つ一つの質問に丁寧に答えて頂き、タイトル通り、「博士課程のすべて」を探っていく時間になりました。



「エーク・カーム・カロー  
少女よ、大志を抱け！」

1月30日(木)  
Vol.10 with 池田 知歌子さん

東京女子大学人間社会科学専攻 グローバル共生社会分野2年の池田さん。  
当日は、研究のフィールドであるインドでの調査についての報告を中心に、早期幼児教育の重要性など、現地に赴いてみなければわからなかったことなどについて、様々なお話を伺うことができました。  
時には笑いも起きる和やかなムードの中で、インドと日本の違いについて考えました。



「映画『ハンナ・アーレント』  
から考えるドイツ史」

3月13日(木)  
Vol.11 with 紀 愛子さん

昨年の3月に東京女子大学の修士課程を修了された紀さん。  
現在は、早稲田大学文学研究科西洋史学コース博士後期課程在学中で、ナチ体制期ドイツにおいて行われた、精神障害者や知的障害者に対する大量殺害、通称「安楽死」作戦について研究されています。  
当日は、実際に映画に登場する人物や出来事、時代背景について、紀さんが現地を訪問した際の写真とともにお話して下さいました。



「よいロンブンは  
よいカラダから」

11月27日(水)  
番外編 平工 志穂 先生

東京女子大学には、東女生なら誰でも、無料で利用できるトレーニングジムがあります。その施設を今まで以上に知ってもらい、もっと活用されるきっかけになればと、当日は平工志穂先生ご指導のもと、大学院生が体力測定などを行いました。  
大学院生は研究のため、どうしても運動不足になりがちです。自分の体調を知ることは、自分自身を知ることもつながるのだと感じました。



### 東京女子大学 女性研究者支援室

【住 所】〒167-8585 東京都杉並区善福寺 2-6-1

【TEL】03-5382-6173 内線 2466

【開 室】(月)~(金) 10:00~17:00

【相談受付】(月)~(金) 13:00~18:00 (予約はメールでお願いします)

【場 所】4号館 4202号室

【E-Mail】sowr@lab.twcu.ac.jp

【URL】http://www.sowr.jp